集まるを
ゼロから考える
ワークショップ

2025年1月　飯田文化会館　集まるをゼロから考えるワークショップ運営チーム

これからの時代「人が集まる文化施設」とは？

飯田文化会館は音楽、人形劇、演劇など、多ジャンルの公演が行われ、市民の皆さんが舞台芸術に触れる場、活動する場として利用されている。今の文化会館でも、新しい文化会館でも、もっと多くの皆さんが集まり、活動をもっと盛り上げていこうとしたとき、どのようなアイデアがあるのか。

こうした目的で、2024年11月と12月に、郡市民の意見を集めるワークショップを飯田文化会館で計３回開催した。公募で集まった参加者は10歳代から80歳代まで29名。高校生、コンビニオーナー、製造業勤務、農家…年齢も職業も立場もさまざまな人々が集まった。こうした人々の日常の延長線上にある「生の声」を集めるため、それぞれの「声」をしっかりと受け止められる人物をグループリーダーにお願いした。結果として、井戸端会議のような雰囲気で笑顔で語り合うワークショップとなった。参加者それぞれの生き方が反映された、貴重な声をいただくことができたと思う。

本レポートには、各グループリーダーの紹介、各グループの話し合いの流れ、３回目に実施した参加者からの意見・感想の要約を記載した。おわりには、グループリーダーの長老である高橋寛治氏と、３回目に宮田村から参加した公民連携地域プロデューサー 坂口淳さんのコメントを掲載した。

テーマとした「集まる」は、「新しい文化会館の整備に関する基本構想」の「基本理念」におけるキーワード「集う」からきている。文字の向こうに、今も飯田下伊那で暮らしている参加者たちの存在を想像しながらレポートを読んでいただければ幸いだ。

開催日時
2024年11月8日(金)・22日(金)・12月13日(金)　全3回＜１回約２時間＞

参加人数（公募）
飯田下伊那在住 27名　東京都 1名　中川村 1名　計29名

開催方式
参加者を４グループに分け、各グループにグループリーダーを設けた。
３回目に全員が意見や感想を発表した。議論の方法は各グループリーダーに一任した。

Aグループ

グループリーダー

荒木 利尚

地域プロデューサー

飯田市生まれ　東京在住　テレビドキュメンタリー・バラエティ番組などのプロデューサーを経て、旭山動物園ライブコンテンツや飯綱町りんごジュース活性化事業など、観光や地域振興の分野でもプロデュースを手がけている。

自己紹介を深堀りし、その人の背景をなるべく明らかにするよう努めた。そして「喜びで集まる」「怒りで集まる」など、喜怒哀楽で考える「集まる」。逆に「集まりたくない」ことなど、様々な角度から考えた。そんな中、参加者の保育士が、園で毎朝焚き火をしており、子どもたちは自然と焚き火に集まってくるというエピソードが紹介された。グループのメンバーは、この焚き火こそが「集まる」のシンボルであり、根源であると共感した。

参加者の意見・感想	
保育士 20代	「集まる」で最初に思い浮かんだのが、園の子ども達がいつも焚き火を中心に朝の会をしているところ。だから「集まる」は焚き火かなと思った。 「人と集まる」ことの楽しさや意味を、小さいうちから子ども達に感じてほしいなと改めて思った。
電気屋・作曲家 30代	焚き火にはエネルギーがある。飯田自体が水引だったり人形劇だったり、活気のあるものがたくさんある。 これを燃料みたいに考えて発展させたら、人が集まるのではとシンプルに思った。
イラストレーター 40代	やりたいことがあるから集まってくるのではと思った。逆に言えば、やらされるとか義務とかだとちょっと嫌だなという感じがした。画一的じゃなく、いろんな色が出てくるような…抽象的ですけど、そういう文化会館になったらいいなと思った。
会社員 50代	楽しい語らいができた。飯田文化会館が新しくなった時、集まった人が温かいものを持って帰れる場所になってくれればいいなと思った。
文化会館職員 50代	人が集まる時にはエネルギーが必要。そして、楽しくなきゃ集まらない。新しい文化会館を作るときはみんなが楽しめる仕掛けを作らないと集まってこない。
八百屋・動画制作 30代	オンラインでいくらでも集まれる時代にリアルで集まることが貴重になっている。そこが大事なポイントだと思う。 リアルで集まる必要性を改めて認識した。文化会館も新しくなるが、時代と逆行してでもリアルを大事にすることがポイントになると思った。
グループリーダー 荒木	Aグループは焚き火にとり憑かれていた。1回目から焚き火の話で終始した。焚き火というと、猿と人間の違い。猿は火を扱えない、人間は危険な火を扱える。僕らがつくる文化会館も一緒で、危険なことも含めて「人間にしかできないものを」ということが言えるのではないか。

Bグループ

グループリーダー

神藤 啓介

コーヒー屋

飯田市在住　自宅で焙煎したコーヒーを、店舗やイベントで販売。パステル画を描いたり、身体の使い方を学ぶワークショップを開いたりするなど活動は多岐に渡る。人呼んで「カウンター越しの賢人」。

文化会館というキーワードは忘れてもらって、なるべく自由にどんな些細なことでも、思ったことを話してもらった。おしゃべりに近い話し合いが、小難しくなく続いた。普段のおしゃべりと違うのは、相手の話に割って入ったり、否定したりすることが少なかったこと。のびのびと議論を深めていくことができた。

参加者の意見・感想	
NPO職員 30代	不登校児などの居場所づくりをしている中で、人が「集まる」「集める」方法を毎日考えている。文化会館に継続的に人が集まるのためには考え続けることが大事。 いろんな人が集まって「集まる」を考えることがずっと続いてほしい。
ライター 40代	集まるという４文字にこんなにいろんな切り口、思いがあって新鮮で楽しかった。何よりたくさんの方が集まって話し合えたことが何かヒントになると思った。
保育士 50代	ダンスや歌のサークルを何十年もやっている。仲間がいるから続いていて、1人増えるだけで新しいことが見つかったり、面白いことが起こったりする。 1人の人と繋がるだけで、新しい関係ができるので、そういう人が集う場所はやっぱり好きだなと思って、集うっておもしろいと改めて思った。
文化会館職員 40代	やっぱそこには熱いもの、魅力がある場所、自分の欲を持って集まる場所になればいい。また機会があれば話を聞いて、自分の中で新しい部分を見つけたい。
農業 50代	自分は天龍村に住んでいる、（Aグループで発表された）焚き火の文化でいうと、近くに霜月祭りなどもある。 国ではなく、住民の方を向いて、いわば飯田文化会館で焚き火をやってしまうような公務員がいてほしい。
アルバイト 30代	普段生活してる中で出会えない方に出会えた、この出会いに感謝したい。 文化会館は、今後の飯田全体に良い影響を及ぼしていく「集まる場所」になるといいかなと思う。
グループリーダー 神藤	いろんな意見が出た。図書館で勉強したり、喫茶店に行くなど、同じ場所を共有しながらもそれぞれが勝手なことをしているという「集まる」。共同体維持のための寄り合いや震災による「集まる」。いずれも、義務・おしつけで集まっても継続しないという意見。自発性、好奇心があり楽しめることが必要という意見。話し合いの後半は、いつも同じ人が集まる必要はない、「集まる現象」が起こり続けていればいいという話になった。継続のために重要なのが「安心できるかどうか」。「安心」を担う場であれば集まりやすくなる。今の人は、夏は体を冷やし、冬は空間を暖かくする。昔の人は、夏は空間を冷やして、冬は体を温めたという。そうすると一瞬の快感は得られないが、暑さや寒さを味わえるだけの余白が生まれ、安心が得られるということではないか。

Cグループ

Cグループリーダー

高橋 寛治

地域プランナー

飯田市在住　市役所職員時代にりんご並木再開発に携わり、退職後は高野町副町長、総務省地域力創造アドバイザーなど歴任。80歳を越えた現在も、読書会やフォーラムを開催し、住民と共に「地域とは何か」を問い続けている。

まずはお互いがどんな人かを知ることで議論が深まると考えた。１回目は、自己紹介を1人10分以上たっぷりとしてもらった。そして２回目に向け、各参加者に「集まる」について５項目づつ考えてもらう宿題を出した。口出しはなるべくせずに、最後に意見をまとめることもやめた。参加者のそのままの声を大切にしたかったからだ。

参加者の意見・感想	
情報通信業 40代	いろんな目的の人がいつもいる空間。そんな空間をイメージしながら考えた。 その空間は非日常ではなく、日常の延長にある空間ではないか。ポイントは「非日常」に「日常」も入れること、それが今回参加して考えたこと。
調理士 40代	個人的な話だと、「ネイチャーの自然」と「ナチュラルの自然」そして「人」が自分の中で大事なんだと気づかされた。 私は忍術道場に通い、図書館で読み聞かせをし、伊豆木人形や駄菓子屋もやっている。そんな自分の、集まる立場と集める立場の両方でいろんなヒントがあった。
文化会館職員 40代	文化芸術はなくても生きていけるが、日常の中で何かのプラスを求めたときに文化芸術が必要になると思う。そこを大事にしたい。
農業 30代	大阪から移住して1年です。私は「伝統と革新の融合」という言葉に行き着いた。 若い人に「文化」はハードルが高く、届きにくい。オンラインも活用して全世代にアクセスできることが「集まる」につながると思った。
製造業 30代	そもそも人間は、1人の寂しさに理由を作れる生き物。「1人の理由」を否定されれば怒る、わかってもらえば喜ぶということがあると思う。 僕の結論は、自然と1人になれる場所と、自然と受け入れてもらえる場所があるとよいということ。
住職 40代	職業柄、人を集めるし、集まる環境をどうつくるかというのを日々の中でやっている。「集まる」は置き換えれるという話も出た。 自分にはどう置き換えるかを考えさせられて良い機会となった。
文化会館職員 40代	集まる人、集まれない人、集まらない人がいるんだと感じさせられた。集まれない人、集まらない人にどうやって利用してもらうかという視点も考えたい。
グループリーダー 高橋	3回目の意見交換で「快い」という言葉が出た。「心地よい」と似ているが「快」と一つの言葉で書くより「快適」「快晴」などの熟語にすることでたくさんの言葉とつながる気がする。それがキーワードだなと思った。「集まる」に「快い」があればできるんだなと思った。 そもそもこの会に大勢の人が集まり「集まる」について考えただけでも価値があった。

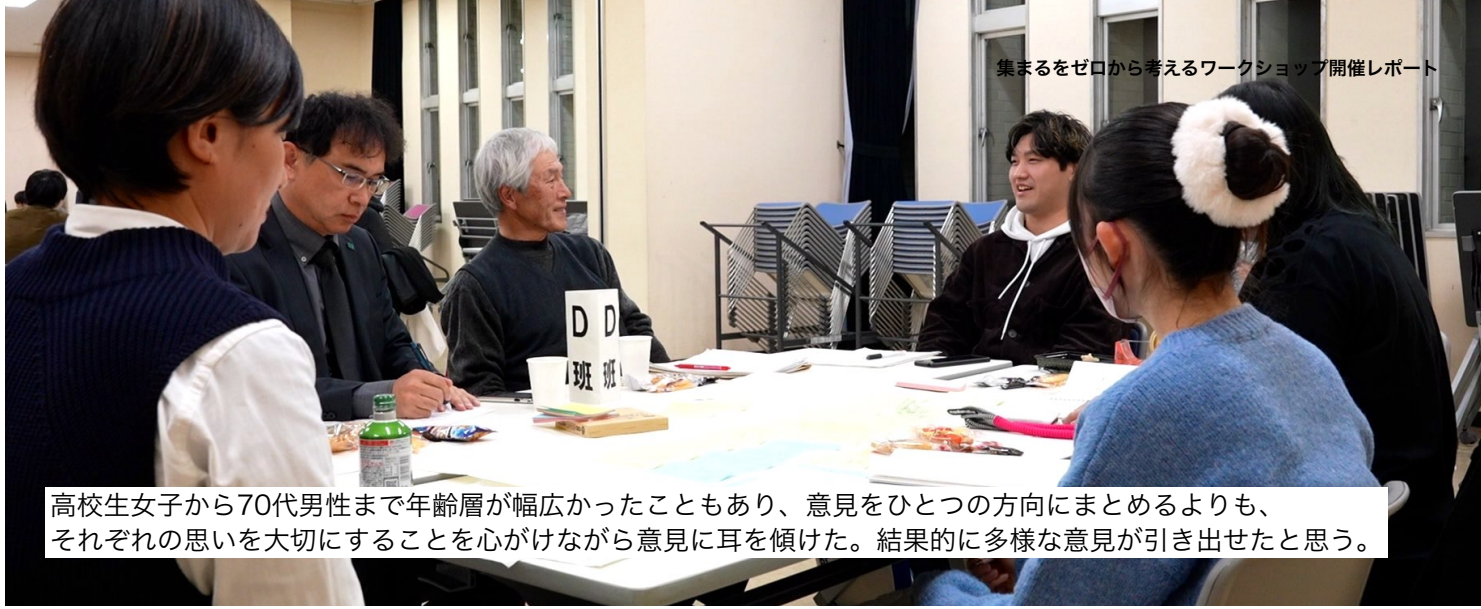
Dグループ

グループリーダー

依田えり子

コンビニオーナー

飯田市在住　東京で写真家として活動後、帰郷。
市内のコンビニを２店舗経営。店外に椅子とテーブルを設けるなど、独自の接客・販売手法に取り組み、大勢の人がくつろげる「選ばれるコンビニ」を実現。



高校生女子から70代男性まで年齢層が幅広かったこともあり、意見をひとつの方向にまとめるよりも、
それぞれの思いを大切にすることを心がけながら意見に耳を傾けた。結果的に多様な意見が引き出せたと思う。

参加者の意見・感想	
営業職　50代	何もないところからどのような人が集まり、コミュニティができて活性化するのか、その連鎖をどうやって作るのか。私の考える集まる場所は自己満足できる場所。
会社員　20代	「集まる」の成功例は飯田駅前のむとすプラザ。利用している高校生は勉強のためや、高校が別になった中学の同級生と会うためなどために集まっている。 風通しが良い場になっていると感じる。文化会館もそのようなイメージの会館であれば、人が集まる空間になるのではと思った。
和菓子屋　30代	川崎から母の故郷の三穂に移住し、三穂の食材を使った和菓子を作って、たくさんの人が三穂に来てもらうために活動している。 どうしたらもっと集められるかと思い、参加した。
無職　70代	来年75歳の後期高齢者。最近、地元の会の代表やシニア大学をやっていろんな人に会えて、自分の人生が新しいところへつながっていく体験をしている。 新しい自分を発見できるという感じ。文化会館もロビーに来るといろんな人に会えるとか、「あれ？何やっとるの」というふうに会話できる場になればいい。
会社員　40代	フェスタ実行委員として月に１、2回は会議に来てる。リーダーのコンビニのカフェにいろんなことが集約されている。座っていても店の人に嫌な顔をされない、会釈もしてくれる。自分が大切にされている感覚を感じられる場所だと思う。なおかつ、友達同士おしゃべりするなど、楽しい、ワクワクがある。ポイントは、そういう場を作ろう思う側＝店の人がいないと成立しないこと。たくさんの人を受け入れたい、集まってほしい、一緒に場を作ろうと思っている人がいてこそだなと思った。
高校生 10代	人を集めることは想像していた以上に難しいと知った。イベントを企画したとしても、広めるのも大変だし、めんどくさいとかつまらないという人もいると思う。意見を聞けば聞くほど、新たな課題が出てきた。あとは、この会に参加して、新しい出会いがとても楽しいものだと気が付いた。未熟な私の意見も一つの大切な意見として聞いてくださるのがうれしく、もっといろんな話を聞きたいとかまた会いたいと思えた。 集まるというのは自分を大切にしてくれる人がいて、新たな学びができる場所なんだなと思った。
グループリーダー 依田	コンビニをやってわかったのは、簡単に人は集まらない、簡単にお客さんは増えない。売り上げを増やすのではなく、もっと人が「集まる」気持ちになるもの、私たちは何を用意すればいいかをずっと考え続けてきた。参加者からは、やってみたい、楽しみたいのようなポジティブな気持ちがどんな時も用意されている場所だとか、人は入れ替わるけど安心できる場所だとか、気持ちよくボーッとしているのを許してくれる場所だとか、小さな微笑みをむけてくれる人がいる場所だとか、必ず人の気配がある場所だとか、様々な意見が出された。幸せな時間をありがとうございました。

おわりに

YC＆ACという日本最古のスポーツクラブが横浜にあり、クラブメンバーが主体で経営しています。メンバーから選ばれた理事やゼネラルマネージャーはいますが、一番偉いのは末端にいるメンバーたち。例えば施設のレストランの売り上げが悪い時は、お金を出したり、友だちとレストランを利用したりする。つまり、運営のためにメンバーそれぞれができることを「自分ごと」としてやり続けている。その精神が大事だと感じています。

加えて、昨年亡くなった松岡正剛さんが提唱したコミュニティが続くための3つの原則「ルル3条」を紹介したい。3つの「ル」はルール・ロール・ツールです。ルールは約束事。ロールは役割。ロールでは利用者だけではなく担い手も大事になる。ツールは象徴的なモノや施設。コンビニの店頭にベンチを設けるのと同じことです。

僕の経験では、自分たちでグラウンドの芝生を植えたり、ベンチをDIYで作ると「自分の場所」になる。他に、公園の中に保育園や福祉施設を作り、日常的に必ず人が行き交う仕組みを用意たこともあります。そうやって自然と場やコミュニティに求心力が働く仕掛けを意図的につくっています。皆さんのお話をとてもとても面白く聴かせていただきながら、そんなことを考えていました。

「集まる」のワークショップを終えました。今回の会議に集まったメンバーは、ほとんどが知らない人ばかり。その仲間が4つの班に分かれて行う作業でした。この知らない人が「ひとつになり、物事を興す」ことに大きな意味があると考え、互いに積極的な発言をしていただきました。

そして、文化施設を作るにあたって「集まる」という命題で自由に話し合うことに意味があると思いました。例えば、各地で人口の減少が課題となっています。その時に「人を増やそう」という命題で会議を開くと、具体的な対策の話しになってしまいます。Iターンの増加や就職先、宅地の整備など、個々の課題になってしまうのです。ところが「人が集まる」をテーマにした瞬間に話が大きく広がることを実感したのです。

その意味で、今回は鳥の目で参加する楽しさでした。そして肩書を持たない皆さんと仲間になることが楽しかったのです。これが、ワークショップの「力」であろうと感じています。

ワークショップ運営チーム：後藤 康介・北林 南・平松 優子・中島 拓也